

台湾ドラマの魅力

人間科学科3年 吉田 萌夏

韓流ブームは記憶に新しい。確かに私も韓国ドラマを見て、面白いと感じ次から次にビデオを借り、見ていた時期があったので、その気持ちもよくわかる。

そのあとは、アジアのドラマよりも欧米のドラマに夢中になり、有名なドラマや気になるドラマを片っ端から見ている時期もあった。

台湾ドラマを見るきっかけとなったのは母が知り合いから「イタズラなエゴ」をかりてきたことだ。まず、日本のコミックが原作になっているという点で私にとって、とっつきやすかったのだと思うが、見ているうちにこの作品に魅了されてしまった。

それをきっかけに、いくつ台湾ドラマを見た。見るたびみるたび知らなかった俳優さんを見

知っていく、見たことのない景色を見る。それが台湾ドラマの魅力であり、多くの人を引き付けるものとなっているのかとも感じている。

私が考える台湾ドラマの魅力を以下の3つにまとめてみる。

魅力1. 日本のコミックが原作になっている

作品が大多数!

最初にも述べているが、「イタズラなエゴ」をはじめ、「花より男子」「ママレード・ボーイ」「ハチミツとクローバー」「花ざかりの君たちへ」「山田太郎物語」などといった日本の漫画や小説が原作となっているものが多いのは台湾ドラマの大きな特徴であり、魅力ともいえる。

さらに原作に忠実にストーリー展開がされて

いるので、原作ファンにとってもとても楽しめる作品であるといえる。言葉がわからなくても楽しめるという点でも、忠実に原作を再現しているところは魅力的であろう。

これはよく聞く話だが、「花より男子」や「花ざかりの君たちへ」は日本でもドラマ化されてヒットしていたが、先にドラマ化して世に送り出されていたのは台湾版だ。それが逆輸入されたような形で日本でも放送されるに至ったケースも多い。

「悪魔で候」この作品は日本の少女漫画が原作になっており、私もとても好きでコミックを全巻集めた記憶がある。その私にとってお気に入りの作品が台湾でドラマ化されており、TSUTAYAで借りて見てみた。本当に忠実に

原作を再現しており、コミックの映像化にあり

がちな「原作とイメージが違う」「原作のほうが断然面白い」といった感想がなく、自然に見入っていた。また、この作品はDVDに吹き替え版が入っておらず、字幕で見たのだが、言葉がわからなくても十分に楽しめた。私にとって「悪魔で候」は深く印象に残っている作品であるし、日本の台湾ドラマファンの間で人気のある作品でもある。ぜひ日本でもドラマ化し、ファンを魅了してほしいと思う。

魅力2・地域の特徴をうまく利用している

日本の漫画や小説が原作となっているといっても、撮影しているのは台湾である。日本人が作ったストーリーをうまく台湾で馴染ませるには、地域とうまく結びつける必要性が出てくる。

私は台湾ドラマを見ていて景色によく注目する。それは単純に日本では見られない街並みやのどかな風景に引き付けられるのであって、「日本の原作なのだからこの景色はイメージとは違う!」といった違和感ではない。むしろ違和感がなく馴染んでいるからこそその注目であ

る。

台湾だと、こんなところがデートスポットなんだな、こんなところが遊び場所なんだという台湾に対してのイメージも出てくる。そして、旅行に行きたいという気持ちにさせられるのは確かだ。

以前韓流ブーム絶頂のころ、「冬のソナタ」のロケ地めぐりが爆発的に流行したと聞く。それと同じように、日本の台湾ドラマのファンの方も、台湾にロケ地めぐりを目的に旅行に行く人は多いようだ。もちろんロケ地に行きたいと意識はしていなくても台湾に実際に行くことで雰囲気を肌で感じたいとか、ドラマがきっかけで台湾に興味を持ち、観光として足を運ぼうと思う人も多いだろう。

このように「旅行」という面でもドラマの魅力が大切であり、一つのきっかけとなるのだ。

魅力3・俳優が魅力的

やはりドラマで一番重要な役割を果たしているのが「役者」である。その役のイメージを作

く役者と役柄がマッチしていないと「原作のイメージが崩れた」「原作の方が面白い」という状況に陥ってしまう。

一般的な日本のドラマを見ている中でも「この役ってこの俳優さんじゃなんか違うよね」とか、逆に「この役すごくハマリ役だな」と感じることはよくある。

違う国の作品をドラマにしているのだからもっと難しいのではないかと感じてしまう。

監督の考えという要素が強いのかもしていないが、「役柄と全く性格の違う人をキャストイングする」ということがよくあるようだ。たとえば、「イタズラな恋愛」ではバカで天真爛漫で一直線な主人公の琴子を演じているアリエル・リンさんは実際には、とても落ち着いていて頭の切れる女性である。DVDの特典映像でキャストにインタビューをしているものがあり、それを見たときの衝撃が忘れられない。あのキヤピキヤピと入江君を追いかけている琴子ではなく、そこにいたのは女優アリエル・リンそのものだったのだ。それと同じようにクールな天才、入江役を演じているジョセフ・チェンさんは実際には現場で場を和ませることが好きであると

か、人を笑わせるようなお茶目な一面もあるのだという。

それだけ作品に対する思い入れや自分が役者として演じていくことへのこだわりが強いんだということがわかる。日本のドラマは大体10〜12話程度で終わるのに対し、台湾では16〜24話と日本より全体的にストーリーが長いというのも、役者が役作りにこだわる理由の一つなのかも知れない。

ちなみに余談ではあるが、台湾では全部撮影が終わってから放送が決定するので、ストーリーの展開や放送数は一定だが、韓国ではドラマの人気によりストーリーの展開や放送数が大幅に変わるそうだ。

また、やはり日本の漫画が原作が作品になっているのも多いので台湾人の俳優の来日の機会も多い。日本のファンを増やしたい気持ちもあるようだし、何より日本の漫画が原作なのだから台湾でだけでなく、日本でも愛される作品であることが重要なだろう。役者自身も日本語を勉強してインタビューには片言の日本語で一生懸命に答えている姿を見ることがあるが、日本人の私としてもその光景は素直にとてもう

れしいことである。

以上に上げた3点が私が思う台湾ドラマの大きな魅力である。

私はまだ台湾ドラマを見るようになって日が浅いが、どんどん魅力的な部分を見つけていくことができる。知らなかった俳優、女優を知っていくことが楽しい。同じような台湾ドラマのファンの方の話聞くのが楽しい。今まで全く興味がなかった台湾に行きたいと思うし、台湾が日本の漫画をここまで映像化するにはどんな理由があるのかなど、知りたいことも次から次へと出てくる。

一般的な日本のドラマを見ている時よりも、新鮮な気持ちで見られるという面も強いのだと感じている。

これからも私の中の台湾ドラマブームはまだまだ続いて行きそうである。